

いん ざい し き はし だい に い せき

印西市木橋第2遺跡(2)

—一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書—



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は、県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの業務内容に加え、平成 25 年度からは千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、一般国道 464 号北千葉道路事業に伴って発掘調査を実施した印西市木橋第 2 遺跡（2）の調査報告書です。本遺跡からは、平安時代の骨蔵器を納めた土坑墓が見つかり、この地域の歴史を知る上で貴重な成果を加えることができました。

このたび、本書を千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 1 集として刊行する運びとなりました。本書が学術資料としてだけではなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として、多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、御指導・御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関に、心から感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長 湯淺京子

凡　例

- 1 本書は、一般国道 464 号北千葉道路事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印西市吉高字木橋 430-2 に所在する木橋第 2 遺跡（2）（遺跡コード 231-023）である。遺跡名の末尾の（2）は、本遺跡の第 2 次調査を示している。
- 3 発掘調査は、平成 24 年度に千葉県県土整備部北千葉道路建設事務所の委託を受けて公益財団法人千葉県教育振興財団が実施し、整理作業から報告書刊行については、平成 25 年度に千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。詳細は以下のとおりである。

○平成 24 年度【発掘調査】

公益財団法人千葉県教育振興財団

調査研究部長	関口達彦
調査 2 課長	橋本勝雄
調査担当者	主任上席文化財主事 山田貴久
発掘調査期間	平成 25 年 3 月 5 日～3 月 13 日

○平成 25 年度【整理作業・報告書刊行】

千葉県教育庁教育振興部

文化財課長	湯淺京子
発掘調査班長	蜂屋孝之
整理担当者	主任上席文化財主事 山田貴久
整理作業期間	平成 25 年 10 月 1 日～11 月 30 日

- 4 本書の執筆・編集は、山田貴久が担当した。
- 5 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
 - 第 1 図 国土地理院発行 1/50,000 数値地図「成田」「佐倉」を 1/100,000 に縮小して使用
 - 第 2 図 印西市発行 1/2,500 都市計画基本図を 1/4,000 に縮小して使用
 - 第 4 図 国土地理院発行 1/25,000 数値地図「小林」
- 6 図版 1 に所収した遺跡周辺の航空写真は、京葉測量株式会社による平成 19 年 1 月 14 日撮影の 2007C-C15A-31（約 1/10,000）を使用した。
- 7 本書で使用した座標は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北を示す。
- 8 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、印西市教育委員会、公益財団法人千葉県教育振興財団、根本岳史、能勢幸枝ほか、多くの機関、多くの方々から御指導・御協力を得た（敬称略）。

本文目次

第1章 調査の概要.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の経過と方法.....	2
第2章 遺跡の位置と環境.....	4
1. 遺跡の位置と地形.....	4
2. 周辺の主な遺跡.....	4
第3章 検出した遺構と遺物.....	6
第4章 まとめ.....	7

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 北千葉道路の路線と遺跡の位置..... 1	第4図 木橋第2遺跡と周辺の主な遺跡..... 5
第2図 木橋第2遺跡周辺の地形..... 2	第5図 SK-001 6
第3図 トレンチ・グリッドの配置、 基本層序..... 3	第6図 SK-001出土遺物 7

表目次

表1 木橋第1・第2遺跡調査歴..... 8

図版目次

図版1 遺跡の位置、調査前状況

図版2 調査状況、SK-001と出土遺物

第1章 調査の概要

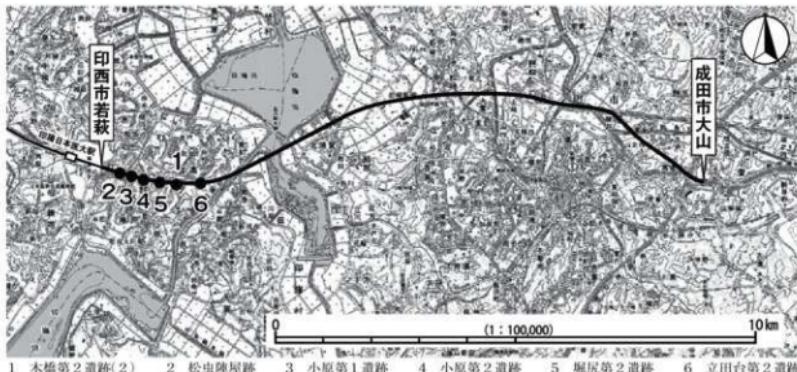
1. 調査に至る経緯(第1図)

一般国道464号北千葉道路は、市川市から千葉ニュータウンを経て成田市までを結ぶ全長約45kmの幹線道路である。そのうち、都市計画道路3・3・39号との交点である印西市(旧印旛村)若萩から、国道295号に接続する成田市大山までの約13.5kmの区間(北千葉道路(印旛~成田))は、首都圏や千葉県北西部地域と成田国際空港間のアクセス強化などを目的に、成田国際空港と直結する成田新高速鉄道と一緒に整備事業が現在進められている。この区間の整備は、空港アクセスの大幅な改善のみならず、沿線地域の相互交流・連携の促進、交通処理能力の向上、物流の効率化等、地域の活性化に寄与するとともに、成田市街地における交通の円滑化、広域道路ネットワーク及び救急医療・防災機能の強化等に大いに貢献することが期待されている。なお、成田新高速鉄道については、平成22年7月17日に京成電鉄成田空港線(成田スカイアクセス)が開業し、先行してその機能の一翼を担っている。

平成16年、この成田新高速鉄道・北千葉道路整備事業の実施に先立って、千葉県土整備部道路計画課から「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書(平成16年9月15日付・道計第145号)が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では、現地踏査を実施し、その結果を踏まえて印旛地区事業計画地内に6か所の遺跡が所在する旨の回答(同年11月29日付・教文第16号62)を行った。この回答により、6遺跡の取扱いについて関係諸機関による協議を重ねた結果、事業の性格上計画変更が困難なため、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、公益財団法人千葉県教育振興財團(以下、千葉県教育振興財団)が発掘調査を実施することになった。

印旛地区の6遺跡の発掘調査は、平成18年8月から小原第2遺跡を皮切りに始まった。一部期間を重複しながら、当該年度中に堀尻第2遺跡、小原第1遺跡、松虫陣屋跡、立田台第2遺跡、木橋第2遺跡の調査が続き、翌平成19年度には立田台第2遺跡、小原第1遺跡、小原第2遺跡、平成20年度には堀尻第2遺跡の追加調査を行った。一方、整理作業は平成19年度から始まり、その成果は平成21年度までに3冊の報告書にまとめられ刊行されている^(註1)。

今回、本書に報告する木橋第2遺跡(2)は、北千葉道路の仮称5号橋施工に伴う工事ヤード確保のために追加調査したものである。



第1図 北千葉道路の路線と遺跡の位置

2. 調査の経過と方法(第2図、図版2)

発掘調査は、千葉県県土整備部北千葉道路建設事務所の委託を受け、千葉県教育振興財團が平成25年3月5日から3月13日まで実施した。調査面積は、1,329m²の調査対象地に対して、上層確認調査136m²、下層確認調査28m²であり、延べ調査面積は164m²となった。

発掘調査は、縄文時代以降を対象とした上層の確認調査から着手した。調査対象地の地形に合わせて、台地上の平坦部に幅2m×長さ9mのトレンチを2か所(1・3トレンチ)及び幅2m×長さ7mのトレンチを1か所(4トレンチ)、西向き及び北向きの斜面部に幅2m×長さ7mのトレンチを6か所(2・5～9トレンチ)を設定し、表土等を重機で除去した後、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、台地平坦部に設定した1トレンチで、トレンチの北端に近い西側の壁面に半ば埋もれて土師器の甕が出土した。観察すると、出土した甕は表土下10cm～15cm足らずの浅い位置に埋められていたと思われ、トレンチの壁面に掛かるように出土したことは幸いであったと言える。甕の周囲を慎重に拡張して当該遺構を精査するとともに、同種の遺構が追加検出されないことを極め、確認調査の段階で上層の調査を終了した。

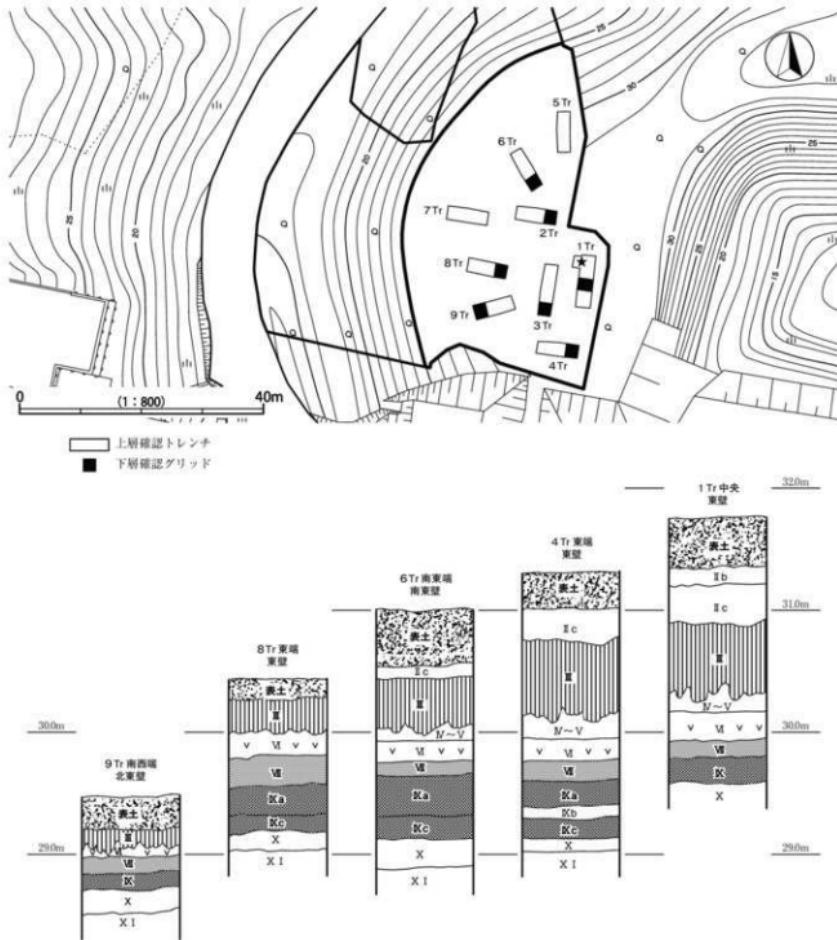
上層の確認調査と半ば並行して、旧石器時代を対象とした下層の確認調査を開始した。上層確認調査のトレンチの一角を利用し、2m×2mのグリッドを設定した。調査対象地の斜面下位にあたる部分は立川ローム層の残りが悪いため、結果的にグリッドは台地平坦部から斜面上部に偏った配置となった。下層の調査は、ジョレン等を用いてローム層を精査してはグリッド内に溜まった堆土を重機で適宜搬出することを繰り返し慎重に進めたが、遺物の出土がなかったため確認調査の段階で下層の調査も終了した。

最終日に重機による埋戻し作業を行い、調査前の状態に復して現地作業の一切を終了した。

整理作業は、平成25年10月1日から11月30日まで、千葉県教育庁教育振興部文化財課発掘調査班が実施し、本報告書の刊行に至った。



第2図 木橋第2遺跡周辺の地形



第3図 トレンチ・グリッドの配置、基本層序

発掘作業では、遺構実測支援システム（遺構くん Cubic）を使用し、調査対象地内に予め打設されていた測量杭の成果を利用して、調査対象範囲図及びトレンチ・グリッド配置図の図化・記録作業を行った。なお、個別の遺構の平面図・断面図・遺物出土分布図等については、平板を用いた従来の実測作業を併せて行い、整理作業の段階で両者を合成・編集した。

第2章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地形(第1~4図、図版1)

木橋第2遺跡(2)は、印西市吉高字木橋430-2に所在する。その位置は、北総鉄道の北総線と京成電鉄の成田空港線(成田スカイアクセス)が乗り入れる印旛日本医大駅から東南東へ約1.2kmの地点にある。

千葉県の北西部にある印西市は、利根川、印旛沼、手賀沼に囲まれた水と緑の豊かな市である。平成22年に旧印旛村と旧本塙村を編入合併した市域は、かつて利根川水運の宿場町として栄えた古くからの町並みが残り、行政の中心地である旧市街地区、ニュータウン開発により人口が急増し、ベッドタウン化が進む新市街地区、印旛沼に面した広い水田や入り組んだ谷津田が広がり、今なお自然の多く残る農村地区など、地区ごとにその景観に大きな差が見られる。

市域の南東側にあり、佐倉市、酒々井町、成田市、栄町との境を画す印旛沼は、江戸時代及び明治以降昭和にかけての開発によって大規模に干拓された結果、印旛捷水路及び中央排水路の両水路を介して繋がる2つの水域に分けられ、現在、その北東の水域を北印旛沼、南西の水域を西印旛沼と呼び分けている。

木橋第2遺跡は、北印旛沼と西印旛沼のほぼ中間地点に位置し、両沼を分断するように南東方向に突出する台地の基部付近に所在する。この台地は、両印旛沼及び両水路に流れ込む小河川によって樹枝状に開析された複雑な地形を呈している。本遺跡は、印旛捷水路に向かって延びる小支谷を南に臨んだ台地上に立地し、遺跡名に(2)を付した今回の調査対象地は、その小支谷の一つの谷頭部に面した台地の肩部から西向き斜面にかけての部分にあたる。標高は30m前後を測り、調査前の現況は山林であった。

今回の調査対象地における土層の基本層序を概観すると、台地上の平坦部では、木根の侵食により表土化が進んだ腐植土層(表土)の下にソフトローム層との漸移層であるⅡc層が25cmほど堆積し、以下、立川ローム層が18mほどの層厚で堆積していることが判明した。立川ローム層は、ソフトローム層であるⅢ層が60cmほどの厚さで堆積し、20cm~25cmを測るⅥ層はATの集中があまり顯著ではない。また、Ⅸ層は30cm~50cmを測り、色調的にやや明るい間層(Ⅸb層)を挟んで概ね3分層が可能である。一方、斜面部ではⅢ層以上が流失してⅣ~V層あるいはⅥ層の上部までソフトローム化が進み、Ⅸ層も薄い。

この基本層序は、直線距離で東に150mほど離れた平成18年度の調査地点(第2図、第4図2)、及び同じく東に650mほど離れた立田台第2遺跡(第1図6)の基本層序ともほぼ似ており^(註2)、本遺跡周辺の台地上における立川ローム層の一般的な堆積状況を示しているものと考えられる。

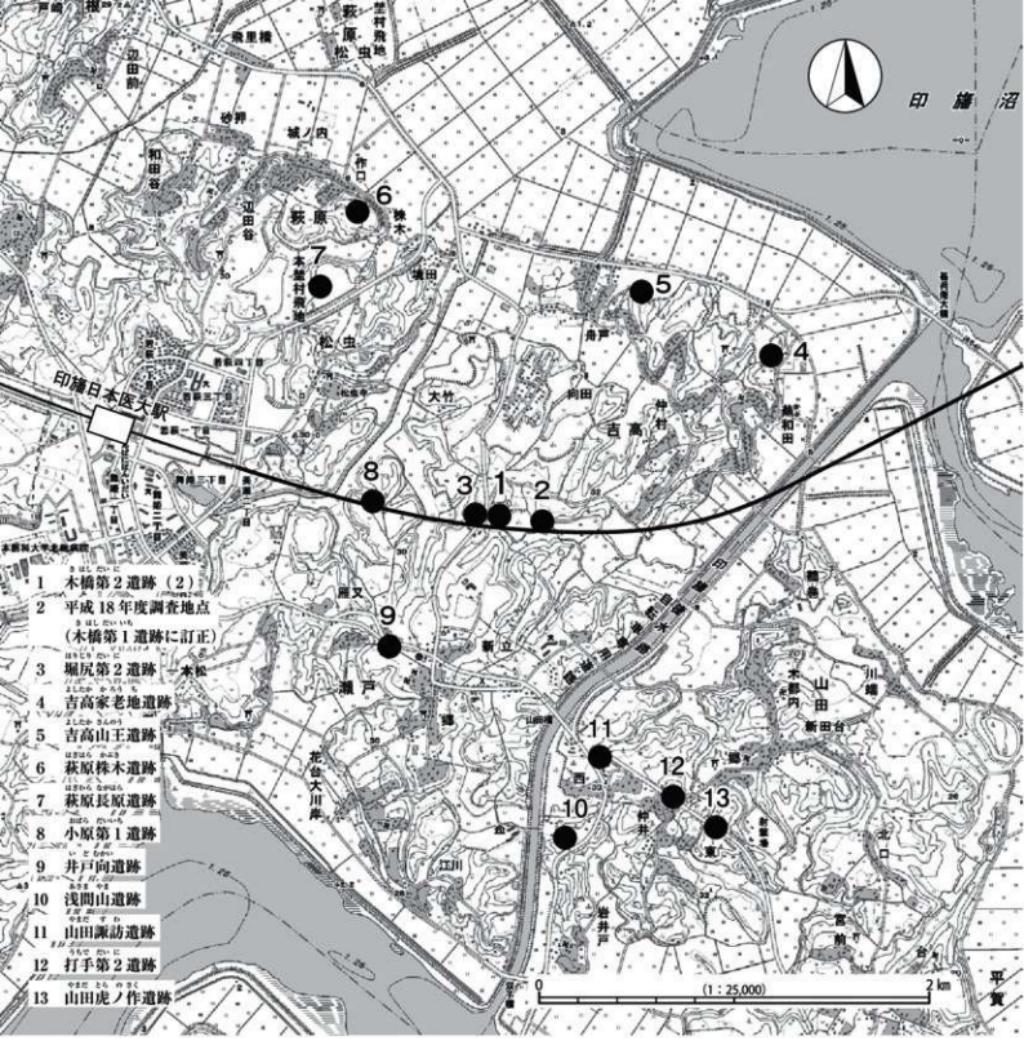
2. 周辺の主な遺跡(第4図)

木橋第2遺跡の周辺台地上には、数多くの遺跡が所在している。ここでは、今回の調査で遺構が検出された奈良・平安時代に特化して、地区ごとに周辺の主な遺跡について概観する。

本遺跡と同じ吉高地区には、今回の調査対象地の西側対岸に堀尻第2遺跡(第4図3)がある。馬の背状の細い台地の肩部付近に、周辺では初例となる奈良時代の方形周溝状遺構が1基検出され、出土した須恵器から8世紀後半代に比定されている。また、北東約1.4km~1.6kmには、吉高山王遺跡(同5)、吉高家老地遺跡(同4)といった集落遺跡の調査例がある。

北西方向にある萩原地区には、約1.5km~1.7kmの地点に萩原長原遺跡(同7)、萩原株木遺跡(同6)がある。萩原株木遺跡では、9世紀中葉~10世紀初めの竪穴住居跡より鉄鉢形土器が出土し、注目される。

南西方向の瀬戸地区には、西方約0.6kmの地点に一辺2mほどの小さな竪穴住居跡が1軒検出された小原第1遺跡(同8)、南西約0.8kmの地点に瓦塔片を出土した井戸向遺跡(同9)がある。



第4図 木橋第2遺跡と周辺の主な遺跡

印旛捷水路を隔てた山田地区には、本遺跡から南東約1.3km～2.0kmの地点に、古くから瓦塔片の出土で知られる山田字浅間山(同10周辺か?)があるほか、山田諒訪遺跡(同11)、打手第2遺跡(同12)、山田虎ノ作遺跡(同13)が近接し、広範囲に集落が存在していたものと思われる。そのうち、山田虎ノ作遺跡では、吉高の地名との関連を思わせる「吉」の墨書き器が出土している。

山田地区のさらに南東方向にある平賀地区には、平賀惣行遺跡並びに平賀細町遺跡、油作第1・第2遺跡という大規模集落を含む平賀遺跡群があり、平安時代に撰ばれた『和名類聚抄』に見える印旛郡吉高郷(現在の平賀、山田、吉高、瀬戸等を含む広い範囲とされる)の繁栄ぶりを彷彿とさせる調査成果がある。

第3章 検出した遺構と遺物

既述したとおり、台地平坦部に設定した1トレンチの北端に近い部分で出土した土師器の壺の周囲を拡張し、平安時代の3個体の土師器の壺を組み合わせて骨蔵器とした土坑墓1基(SK-001)を検出した。一方、1トレンチ以外の上層確認トレンチ及び下層確認グリッドからは、遺構・遺物ともに全く検出されなかった。

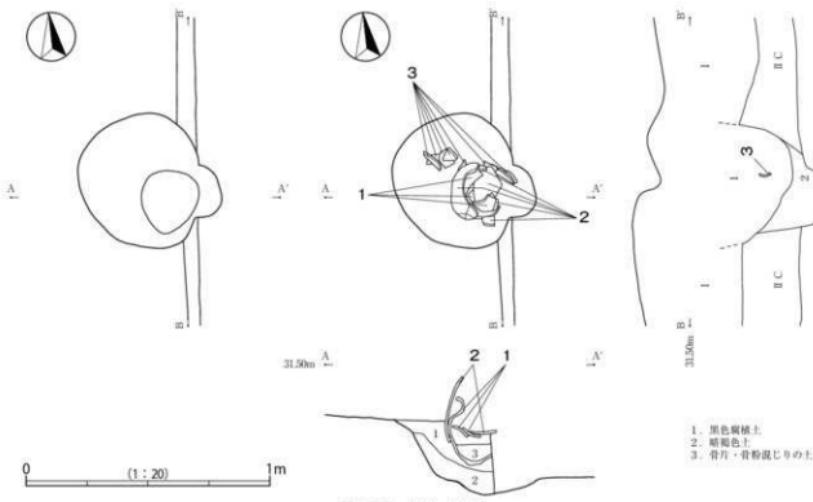
SK-001(第5・6図、図版2)

調査対象範囲の最も東側の台地上に設定した1トレンチより検出された。表土直下(Ⅱc層上面)における本土坑のプランは、直径推定0.8m~1.0mの不整円形で、深さ30cm~35cmを測り、底面は直径0.3m~0.4mのはば円形を呈する。逆位に被せられた壺の底部は、プラン検出面よりも25cmほど高くなると推定されることから、表土中に土坑壁面の立ち上がりは確認できなかったものの、構築時の本土坑本来の深さは、今回検出した深さの倍近いものであったことが推測される。

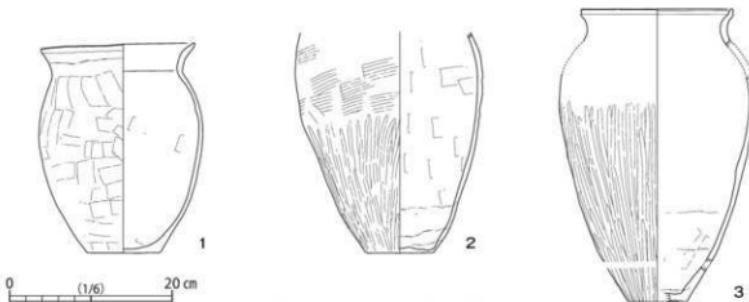
遺物等の出土状況を見ると、プランのはば中央に口縁部を下に向けて伏せた状態の土師器の壺(第4図2)がほぼ直立して出土し、その内側に口縁部を上に向けたひと回り小さい土師器の壺(第4図1)が正置されていた。2つの壺の内側の空間は、土が充填されることなく空洞のまま保たれており、内側の壺の底部近くには、火葬された人骨と思われる骨片が土混じりの状態で検出された。骨片の遺存状態は非常に悪く、粉末状になっている部分も多かったため土ごと採取した。選別したところ、全245.7gの採取資料のうち骨片・骨粉は41.6gで、大腿骨の一部と思われる最も長い骨片は37mmを測る。

遺物は、出土した大部分の土師器片が接合し、図示した土師器3点に分類・復元できた。他に、別個体の土師器小片2点及び縄文時代後期・加曾利B式期の土器小片1点が出土した。

1は、土坑底面から10cmほど浮いた位置に正位にはば直立した状態で出土したもので、武藏型の小型の壺である。胎土の赤みが強い。2は、1の外側に接するよう伏せて被せられた状態で出土したもので、常陸型の壺である。胎土が白っぽく、胴下半部の縱位の細いミガキが特徴的である。3は、最も外側に伏せて被せられていたと思われる常陸型の壺で、欠損部分が多いものの2とほぼ同様の壺と思われる。いずれも器形等の特徴から、平安時代の初め頃(9世紀前葉)のものと思われる。



第5図 SK-001



第6図 SK-001出土遺物

第4章まとめ

今回の調査では、当初、確認トレンチにおける遺構検出面をⅡc層下面～Ⅲ層上面に設定していた。図版2のSK-001の遺構検出面に段差が生じているのは、トレンチ壁面に半分引っかかるように出土した土師器壺の西側を拡張した際に、少しでも上面で遺構のプランを検出しようと、表土層から慎重に精査した結果である。ただ、復元すると、伏せられた外側の壺の底部は西側の検出面よりさらに上位にあたる現地表面下10cmほどの位置にあったと推定され、本土坑墓構築時の地表面が、現地表面とわずかな高低差しか持たない表土中にあったことを示している。改めて、遺構検出の難しさを痛感させられた調査となった。

ここでは、今回検出した骨蔵器を伴う土坑墓から、本遺跡とその周辺を概観してまとめとしたい。

わが国における火葬の始まりは、「統日本紀」文武四年(西暦700年)三月己未条に記された日本法相宗の祖・道昭の火葬とされる。そのわずか2年後には持統天皇が遣詔して翌大宝三年(703年)に火葬され、文武、元明、元正と続く奈良時代前半の歴代天皇をはじめ、僧侶や官人、中央及び地方豪族たちの間に、平安時代の前半まで一種の流行のように火葬が広まったといわれている。

千葉県においては、印旛郡栄町の麻生広ノ台遺跡や竜角寺ニュータウン遺跡群での検出例から、中央でその葬法が始まって間もない8世紀前葉における火葬の実施が確実視されている。現在までに確認された遺構数は概算で250件を超える、8世紀後半に増加し、9世紀前半頃をピークにして10世紀代には急速に衰える消長を迎えることができるという。また、その分布は、上総の旧望陀郡、海上郡、畔蒜郡(現在の君津・木更津・袖ヶ浦・市原の各市域)などの東京湾寄りの地域と、下総の旧埴生郡(成田市・栄町)に当たる北印旛沼東岸地域に集中し、恰も旧東海道に沿って分布する傾向が見られる。

旧埴生郡域に見られる火葬墓の特徴として、単純な土坑に骨蔵器を納めたタイプが多く、骨蔵器も土師器や須恵器・灰釉陶器などの壺壺類を用いる極めて一般的な様相を呈し、周溝等の区画を持たずとも整然と区別された独立した墓域を形成することが多いといわれている。

本遺跡の位置は、北印旛沼の南西部に当たり、印旛沼周辺地域とは言え、旧埴生郡域における火葬墓の集中地域とは地点を異にしている。ただし、今回調査されたSK-001は、土師器の壺を骨蔵器として納めた単純な土坑墓であり、当地域における火葬墓の一般的なものと使うことができる。

古墳時代後期～終末期の大規模な古墳群である龍角寺古墳群や白鳳期の龍角寺跡、埴生郡衙跡等が展開した北印旛沼東岸地域の対岸にあたる本遺跡で検出された1基の火葬墓は、鉄鉢形土器を出土した萩原株木遺跡、瓦塔片を出土した井戸向遺跡及び山田字浅間山、印旛郡吉高郷の繁栄ぶりを彷彿とさせる平賀遺跡群などとともに、この地域における古代の仏教信仰の広がりと、仏教儀礼を受容した富豪層の足跡を知る貴重な成果となった。

註1) 平成18年度に実施された「木橋第2遺跡」の調査については、平成21年度3月に刊行された報告書((財)千葉県教育振興財団2010)に立田台第2遺跡の調査成果とともに所収されている。その成果との混亂を避けるため、今回は遺跡名称に(2)を付し「木橋第2遺跡(2)」と呼称することとした。だが、発掘調査・整理作業の進捗に伴い、平成18年度の調査地点は「木橋第2遺跡」ではなく「木橋第1遺跡」の範囲内にあることが判明し、さらに遅った昭和56年度に、吉高木橋道路調査会による発掘調査が今回の調査地点の東側隣接地点で実施されていることも明らかになった(千葉県教育庁文化課1983)。

結果的には、遺跡名称に(2)を付けたことは誤りではなかったため、今回の調査における一連の作業時及びその成果のすべてにおける遺跡名称は「木橋第2遺跡(2)」を踏襲することとした。

本報告書の紙面を借りて、混亂が生じた木橋第1遺跡、木橋第2遺跡の調査歴を次表のように整理する。

表1 木橋第1・第2遺跡調査歴

木橋第1遺跡	調査年度	対象面積	上層		下層		備考
			確認調査面積	本調査面積	確認調査面積	本調査面積	
第1次調査	H19	1,160 m ²	162 m ²	0 m ²	28 m ²	0 m ²	遺構・遺物は検出されず確認調査で終了 *(財)千葉県教育振興財団(2010)所収の「木橋第2遺跡」の遺跡名称を訂正
木橋第2遺跡	調査年度	対象面積	上層		下層		備考
木橋第2遺跡	調査年度	対象面積	上層		下層		備考
			確認調査面積	本調査面積	確認調査面積	本調査面積	
第1次調査	S56	約15,000m ²	1,500 m ²	-	-	-	弥生時代後期の堅穴住居跡5軒を確認 *(財)千葉県教育庁文化課(1983)所収
第2次調査	H24	1,329 m ²	136 m ²	0 m ²	28 m ²	0 m ²	土師器の要素を藏骨器として理納した平安時代の土坑墓を1基検出した *本報告書所収

2) 平成18年度調査時の土層柱状図((財)千葉県教育振興財団2010, P.73第54図)では、立川ローム層のⅧ層以下は、約55cmの厚さを持つⅦ層と15cmほどのⅨ層、20cm~30cmのⅩ層に分層されている。そのうち、Ⅶ層上半部を「Ⅶ層」、下半部及びⅨ層を「Ⅹ層」と読み換えると、今回の調査及び立田台第2遺跡における調査成果(同書、P.9第5図)と概ね合致する。

*当書の執筆に際し、以下の文献を参考にした。

石戸啓夫 1998「81麻生・龍角寺遺跡群」「千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)」千葉県 県史シリーズ11

印旛村教育委員会 1977「吉高山王遺跡」

印旛村埋蔵文化財分布調査団 1980「印旛村の古代文化・遺跡の分布と採取資料の紹介~」

京都大学文学部国語学国文研究室編 1977「諸本集成 億名類聚抄【外編】日本地理資料 -倭名類聚抄國都郡里部卷注-(丙版)」蘿川書店

(財)印旛都市文化財センター 1994「千葉県印旛郡印旛村印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書-平賀線行跡・山田虎ノ作遺跡

・井ノ崎古道跡・光明寺遺跡・打手第二遺跡・山田源詮道跡-」(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第81集

(財)印旛都市文化財センター 2000「千葉県印旛郡印旛村 萩原株木遺跡-印旛村道ニュータウン・萩原埋蔵文化財調査-」

(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第161集

(財)印旛都市文化財センター 2000「千葉県印旛郡萩原長原遺跡・猪谷塚群」(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第162集

(財)千葉県教育振興財団 2009「成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財調査報告書2

-印旛郡印旛村小坂第1遺跡・小坂第2遺跡・福尻第2遺跡-」千葉県教育振興財団調査報告第620集

(財)千葉県教育振興財団 2010「成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財調査報告書4 -印旛村立田台第2遺跡・木橋第2遺跡-」

千葉県教育振興財団調査報告第643集

(財)千葉県文化財センター 1996「一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書

-印旛村大木台古墳群・井戸向遺跡・茨燒台所在塚・和田谷津塚-」千葉県文化財センター調査報告第277集

千葉県教育委員会 1997「千葉県埋蔵文化財分布図(1) -東葛飾・印旛地区(改訂版)-」

千葉県教育委員会・木下別所庵摩寺跡調査会 1979「木下別所庵摩寺跡第二次発掘調査概報」

千葉県教育庁文化課 1983「吉高木橋遺跡」「千葉県文化財発掘調査抄録・昭和56年度-」

平野元三郎 1972「千葉県上代仏教文化史資料録」「千葉県の歴史4」千葉県

村山好文 1996「82龍角寺ニュータウン遺跡群」「千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)」千葉県 県史シリーズ11

吉澤 恒 2004(2)「火葬墓の出現と広がり」「千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)」千葉県 県史シリーズ12

吉高家老地遺跡調査会 1976「吉高家老地遺跡・発生・土師器落差の調査-」

龍角寺ニュータウン遺跡調査会 1982「龍角寺ニュータウン遺跡群・龍角寺ニュータウン遺跡調査報告書-」

写 真 図 版



遺跡の位置、調査前状況

図版2



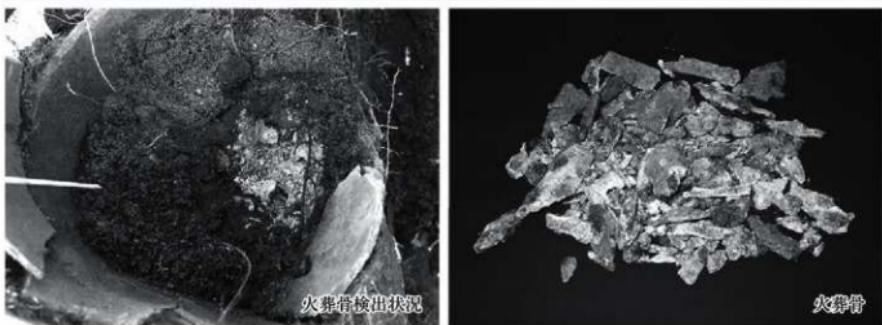
SK-001 出土遺物



第6図 1

2

3



調査状況、SK-001と出土遺物

報告書抄録

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第1集

印西市木橋第2遺跡(2)

—一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成26年3月25日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町1番1号

印 刷 株式会社正文社
千葉市中央区都町1-10-6
